

『講義一』

人間の問題の本質

どうもここにちは。たいへん天気がいいのですが、コロナで大変出にくいところをよく出てきて下さいました。心から敬意を表します。

『教行信証』もこの間から、「総序」が終わつて「教の巻」、ですから『教行信証』の内容に入つていつているわけです。皆さん、なかなか難しいだらうなとります。私も大学に行きました。学問として勉強するということに違和感をおぼえていました。学問というようななことではなくて、もう少し身近に生活感覚のところで言つてくださいたら、こつちもよく分かるのになあと思つておりました。ですから大学院に行く頃、いつそのこと専修学院に行つて実践的な仏教を学んでいこうかと思つて、先輩に相談をいたしました、「ちゃんと勉強しろ」とえらく怒られて、まあ仕方なく大学院に行つたのです。けれども、今言つよう、なにかもう少しストレートに、この宗教というものを、生活の中にズカッと切り込んで問題にしてくれたら分かりやすいのになあ、とずつと思つておりました。

よくよく考えてみると、例えば生活感覚のところでいろんな問題が起りますね。皆さん方、たぶん家族の間とか、隣人の間とか、あるいは夫婦の間、親子の間、いろんな形で問題が様々あると思います。しかし、それに一つひとつ答えているとお釈迦様は体がな

んばあつても足らない。それで学問と言うのは、そのように様々に皆さんのがお持ちの問題を、少し昇華してというか、生活の場から少し上げて、そして、とり上げたらいつぱいある問題が全部包めるというか、うまく言えませんけども、分かりますね。

それぞれの問題があるに決まつてゐる。あるに決まつてゐるのだけども、それに一つ一つ直接答えるというのではなくて、そこに問題になつてゐることは一体どういうことなのか、ということを掘り下げていつて、それでは親子の問題の究極的な問題はここにある、夫婦の問題もここにある、とすると、それはひょとしたら同じ問題ではないかといふうに、生活のところに起つてゐる様々な問題を少し昇華していく。どんなことが起つて、ここにその本質があるのだというところまで昇華していく。そこで親鸞聖人が人間の問題にこたえようとしているわけです。

ですから直接的にはなかなか分かりにくくても、宗祖が言おうとしていることをよく聞いて考えてみると「ああそうか。私のことを言つてゐるのだ」というふうに分かつてくるときが必ず来ます。そういうふうに学問というものは、直接答えるわけではないけれども、それを少し上方にまで昇華して、人間の問題ならここに本質がある、というところまで昇華して、すべての人間の問題を包み得るところ、そこを親鸞は答えようとしているのです。

そういう方法をとつてゐるために『教行信証』を読んでもなかなか分かりにくい。「何を言つてゐるのだろうな」というふうに分かりにくいのです。けれども、まあ、死ぬまで勉強してください。死ぬ頃には分かります（笑）。「なるほど」と思つて感動することがあると思います。「自分は今まで気がつかなかつたけれども、ああそういうことを言つてゐるのか」「それなら分かる」と思つて感動することが

ある。

それが解けたらこの問題はうまくいくのだというように、どうも私たちが見ている問題とは違うところから問題を見て、それに答えようとしているというところがあると思います。

この間から「教の巻」に入つておりますが、今読んだように「教の巻」は全体が短いわけです。ですから今日は一度さつと復習をして思い出してください。まず「謹んで淨土真宗を案するに」、ここに淨土真宗と言う宗名が出てきます。ですから、親鸞聖人は「謹んで淨土真宗を案するに、一種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。」というふうに、最初から淨土真宗の特質を述べようとしているのです。

まずは一代仏教。私たちの聖典は「淨土真宗」の聖典ですけども、『教行信証』は大乗仏教全体に捧げていったわけです。だから、まず一代仏教に対してわが淨土真宗という仏教は他力の仏教であることを。他力の仏教であると言つても、阿弥陀如来の本願力による仏教であること。その本願力に法藏菩薩がご苦労して、私たちのような仏教が分からぬ者を何とかして、共に淨土に生まれたいというふうに、私たちを淨土に連れていくこうとする往相というはたらきと、もうひとつは淨土から還つてきて、それを教化していくくという還相というはたらき、この二つのはたらきによつて成り立つ仏教、それが淨土真宗であると、まずこれを宣言しておられます。そして「往相の回向について、真実の教行信証あり」と、こういうふうに親鸞聖人が言われるわけです。

### 「仏 阿難に告げたまわく」

まず最初に阿難に

「それ衆生ありてかの国に生すれば、みなことごとく正定の聚に住す。所以は何ん。かの仏国の中には、もうもろの邪聚および不定聚なればなり。」

これは第十一願・必至滅度の願の成就文です。これは「もし衆生があつて淨土に生まれれば、みんな淨土で正定聚の位につきます。なぜなら、阿弥陀の淨土には邪定聚や不定聚がないからです」という意味です。

そうするとこれは何を言つてているかと「阿難、実はあなたは正定聚についたのですよ」ということを教えている。だから『大経』で説く淨土は「死んでから淨土に行く」というのではなくて、お釈迦様と出遇つた時、あるいは皆さんが先生と出遇つた時、その時に淨土に生まれて、そして正定聚に住する、そういう位につくことができる。ただし、ただしですよ、身は凡夫だから、淨土に生まれてし

## 正定聚の位ーお釈迦様の阿難との出遇いの意味

これは『大経』の下巻の一番最初に、本願の成就文というものが掲げられます。それは、この間、皆さんと一緒に拝読しましたお釈迦様の阿難との出遇い、あのお釈迦様と阿難との出遇いにどんな意味があるかということを、お釈迦様が教えようとしているのが下巻です。

だから阿難に、まあ簡単に言えば、「阿難よく聞け」と、私と出遇つてあなたはこの世を超えたという感動をもつた。その一番大切な感動は、まず聖典の四十四ページ、下巻の最初です。上巻のお釈迦様と阿難との出遇いを踏まえて、お釈迦様が阿難に、あなたが出遇つた仏教の確かさ、それからあなたが出遇つた仏教のすばらしさ、それを教えようとしているのです。

「正定聚の位ーお釈迦様の阿難との出遇いの意味」

まつたというと仏様になつてしまふから、淨土に生まれてしまつたわけではない。しかし、今いただいている信心は淨土の覚りを開いて、そこの正定聚という位に立つことができる。「阿難、あなたは今正定聚に立つことができたのですよ」とお釈迦様が教えてることになります。いいですね、これも詳しく言いだすいろいろあつて、『論』『論註』から始まつてたくさんあるのですが、今はこれくらいにしておきましょう。

阿難がお釈迦様に遇つて感動したと、私はこの世にはないような大きな一如の世界に開放されたのだと。それはどういうことか。阿難は凡夫だから、実は、そのことは分からぬわけです。だからお釈迦様の方から「阿難よく聞け。あなたが今感動して、そしてこの世を超えたというふうに思われるるのはその通りだ。あなたは他力の信心によつて、本願を信じる信心によつて淨土の正定聚という位についたのですよ」ということがあります。そしてその次に、

#### 十方恒沙の諸仏の勧め

「十方恒沙の諸仏如來、みな共に無量壽仏の威神功德の不可思議なることを讚嘆したまう。」

「十方恒沙の諸仏如來」というのは、東西南北四維上下の諸仏たち「恒沙」というのは、皆さんインドに行つたことはありませんね。インドに行くとインドの人達はガンジス河のことを「ガンガー、ガンガー」と言います。あれです。「ガンガーの砂のよう」と、「たくさん」のガンジス河の砂の数ほどの諸仏たちがあなた方に先立つて、阿難に先立つて、念佛の教えを説いてくださいからですよ」と。自分で努力して分かつたのではない。

私たちが仏教に触れる時に、努力して聞法することも大事ですよ。

ですけども、努力の先にもし覚りがあるというのなら、それは努力できる人の方が強い。努力できない人はだめなのです。ところが真宗は、むしろ努力できない人の方に重きがあるわけですから、皆さんも考えたら分かるとおりよ、今日、こんなコロナでね、これ普通怒られるよ、こつそり来ないと（笑）。「年寄りがそんなところに出て行くな」と言つて怒られるで。それでも来たいと思つてくるわけでしょう。そこまでお思いになつているということは、それは、これまでに仏教に縁があつたのです。ご両親のご縁があつたり、おじいちゃんおばあちゃんのご縁があつたり、近くの仏教者の方に遇つて感動したり、そういうことがないと、私たちは仏教にご縁がありません。それを言つているのです。

自分の努力とか能力とか、それから頑張つて覚りを悟つた、そんなことではないよ、と。阿難よく聞け、あなたに先立つてたくさん的人が、あなたの後ろから、念佛者になれと応援している。その声によつて私たちは育てられてきたのですよ、と言うわけです。分かれますよね。

私も自分のことを言うのは恐縮ですけど、今から考えると貧しい中で育ててくださいた両親のおかげやつたと思います。それから周りに苦しんだおじいちゃんやおばあちゃんたちが、不思議やなと思ふのですが、そういう人たちがだれ一人として「偉くなつてほんちゃん食えるものにならないとどうにもならんよ」と言う人は一人もおらなかつた。いやいや皆さん笑いますけど、うちは極貧だからね。食えなかつたから。だから心配してくださいたら、そう言つてくださいてもいいのに、「ほんちゃん大きくなつたら、親鸞聖人の教えを私に教えてください」と言つてばあちゃんたちがみんな私を育ててくれた。ばあちゃんが頭をなでてくれて、カンロ飴を貰つたりいろ

んなことをした。それはうれしくてね、自分が好きなおばあちゃんがこれだけ喜んでくれるのだと思って、やっぱり子供でなにも意味が分からなくとも、「ああ仏教ってやつぱりすごいのやな」と思つて、いつの間にか育てられていつたわけです。皆さん方一人一人みんなそうだと思います。真宗のご門徒にお生まれになつたということは、そういうことです。それによつて育てられているのですよ。そして最後には、

### 如来回向の信心によつて

「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く」と。

ここははつきり「回向された信心によつて、阿難、あなたは仏様の世界を知ることができたのですよ」と。如来回向の信心によつて、分かりますね、私たちのもつ力とか能力とか、人はそれぞれいいものを持っています。愛情とか正義感とか良心とか。しかしそういうものをいくら振りかざしても、阿弥陀の浄土にはなりません。如来回向の信心、人間の中にはないけれども、如来回向の信心、その信心によつて「阿難、あなたは如来の世界を知ることができたのです」と、お釈迦様が教えてくださつてゐるわけです。

ここが最初の  
第十一願・必至滅度の願は、親鸞聖人は「証の巻」に掲げています。  
それから

第十七願の諸仏称名の願、それは「行の巻」に掲げています。

第十八願の回向に信心については「信の巻」に掲げています。

全体は『大経』ですから「教、行、信、証」すべて往相回向の本願

による。本願によつて教・行・信・証が成り立つということは、いいですか、これは一代仏教から言えば、他の仏教から言えば、凡夫は仏教なんか歩けないと。凡夫はそもそも仏教は分からないし、仏教なんか歩けないというのが凡夫です。その凡夫に仏様の方から、本願によつて教・行・信・証を私たちに与えてくださつて、私たちに仏になる道に立たせてくださる。そういう他力の仏教が「浄土真宗」という仏教であると親鸞聖人は最初に宣言しているのです。

こう言うのは、今申し上げましたように、一代仏教、浄土教以外の聖道門から法然の『選択集』が非難されて、そして法然の『選択集』が明恵が書いた『摧邪輪』によつて非難される。その内容に答えていみると考えても間違いありません。明恵がこれと同じように非難するわけです。凡夫は仏教には立てない、だから凡夫なのです。凡夫が仏教なんか分かるかと。だから凡夫なのでね。分かるわけがないということに対して、親鸞聖人は、「違うのだ。阿弥陀如来ということさえ分かれば、阿弥陀の本願力によつて、凡夫が仏道に立つことができる。それが浄土真宗という他力の仏教なのだ。」といふうに、まず最初に宣言していきます。そして、

### 真実の教を顕さば即ち『大無量寿經』これなり

「それ真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿經』これなり」。

いい言葉ですね。他力の信心、本願力回向の信心ということを説いている経典は『大無量寿經』以外にありません。いいですね。先ほど本願の成就文を読みましたね。「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す」。至心に回向せしめたまえり。本願力の回向の信心によつて浄土に生

まれる。こういふことを説いているのは『大無量寿經』以外にないから、ここに「『大無量寿經』これなり」と。「眞実の教」だと。

これも申しあげたかもしませんが、一代仏教から言えば、眞実を説いている經典は『法華經』です。その『法華經』に対して、「眞實の教を顯さば、すなわち『大無量寿經』これなり」。これはやつぱりね、私たちは今はなんともないでしょう。これね、はつきり言うけど殺されますよ。法然は結局は殺されたのですからね。流罪になつて、そして流罪から許されてすぐに死んでしまつた。だから結局法然上人は流罪で亡くなつたということになります。

法然上人に弟子が言うのよ。もう私たち一生懸命に念佛を称えて、大切なことを伝えてきた。だけでも結局流罪になつて殺される。だから、土佐に流されて行くときに、すがり付いて「お師匠様、もう念佛やめてください」と弟子が言うのよ。そうしたら、法然は「はねるのは首だけだろう、念佛の命まで殺せないだろう」と言つて、いくら言つても念佛をやめなかつたのですよ。まあ大したものやとか、命を捨ててるわけですね。

そうだろうと思ひますけれども、親鸞聖人も、やはりこういうもののを書くというのは当時は、比叡山はものすごい権力集団、武力集團ですから、あそこの日吉神社に行つたら分かるでしょう。ものすごく大きな神輿があります。あの神輿を担いで暴れるわけです、僧兵どもが自分たちが気に入らないことがあると、あの神輿を担いで街に出て暴れるわけです。なぜなら寺社奉行しか取り締まれないから、街に出て行くと、坊さんたちが神輿、担いで暴れだすと、「やめろ」と言う人がいよいよです。寺社奉行しか取り締まれないからね。そういうふうにして、自分たちの思いを通すというので、むちやくちやするわけですよ。武力集団ですよね。

そういう状況の中で法然も死んでいつたわけです。だから、そういう中で親鸞も『教行信証』をよほどの覚悟をして書いたに違ない。しかも、今言つたように『法華經』があるにもかかわらず、ここに「それ、眞実の教を顯さば、すなわち『大無量寿經』これなり」と言つて、そうすると、もう明らかに『法華經』・天台宗と対峙してこれを言つてゐるわけです。だから、よほどの覚悟がいつたと僕は思ひますけれども、こういふ文章があるわけです。

### 分別を超えた一如の世界

そして「この經の大意は」とあつて、

「阿弥陀如来が法藏菩薩の発願、そして法藏菩薩のご苦労を開いてくださつて、凡小を哀れんで法藏菩薩が名号ひとつを選んでくださつた」。これが法藏菩薩、阿弥陀のはたらきです。

「お釈迦様はこの世に出てきて、仏教を明らかにしてくださつて、群萌を救うために本願を説いてくださつた」。

「ここをもつて、如來の本願を説きて經の宗致とす。すなわち、仏の名号をもつて經の体とするなり」。こうあります。宗・体によつて、これもよく考えてくださいね。二つ、阿弥陀とお釈迦様と二つあります。が、二人いるわけではありませんよ。いるのはお釈迦様一人です。阿難がお釈迦様に遇つて、お釈迦様の教えに感動して、そしてお釈迦さまがこの世を超えた阿弥陀の世界を開いてくださつた。その阿弥陀の世界が弥陀。だから二人おるわけじやありません。分かりますね。

大学院の時に、私は、皆さんよく知つてゐるでしょう、「二河白道の譬喩」がゼミの発表で当たつたのです。一生懸命勉強をすればす

るほど、阿弥陀如来とお釈迦様と二人おるようになるのです。お釈迦様がこちらから「淨土に行け」と言つてくださつてゐる。淨土から「汝一心に正念にして直ちに来れ」と言つてくださつてゐる。勉強すればするほど分かれていくのです。おかしななと思いながら発表したら、案の定、松原先生に机たたかれて怒られた。「馬鹿たれが！」と言つて（笑）。しかし、ああいうところを怒つてくださるというのが、またありがたいよね。力いっぱい怒つてね、そして「馬鹿もんが！」二人おるわけではない、そもそもお前は信心がどうやつて起ころかという、その事実が分かつとるか」と怒られて、「信心の事実と頭で考えることは違う」と言われました。

そうですね、先生に遇つて初めて阿弥陀の世界が開かれたと言つて感動する、その信心の事実と、それを今度は頭の中でこねくり回して「阿弥陀と釈尊と二人おつて、真ん中に白道が通つていて」なんて考え出すと訳が分からんことになる。「それが違うんだ！」と怒られてね。まあ申しあげていることは分かりますね。

だからここも二人おるわけではないのです。お釈迦様を通して阿難が感動した世界が阿弥陀の世界だつたわけです。この世にない世界です。分別を超えた一如の世界。それに感動したわけですね。こいつふうに、まず他力の仏教、そして弥陀と釈迦というふうに分けながら大意を述べておられます。

### 「出遇い」—他力の仏教の核心

前回、西藤さんが質問してくださつた。僕はその質問の意味をひよつとして取り違えてたかもしれないと思って、今日もう一度「この間は、あれは何を聞きたかったの？」と聞き直したのです。単純に言つと「教の巻」というのはお釈迦様と阿難の出遇いだけしか説か

れてない、だから、要するに他力の仏教というのはその出遇いだけなのか」と聞かれました。その通りです。出遇いだけ。出遇いの中に阿弥陀の覚り、阿弥陀の淨土を感得し、そして、出遇いの中にこの世を超えたものに救われていく、他力の信心に救わられて行く、ということがあるわけで、出遇いしかない。

逆に言つると、いいですか、はつきり言つと「出遇いを通さないと仏教は分からぬ」というのが他力の仏教の特質です。この中にも「よく自分のような者が仏教に入れたものだ」と思う人もおるだろうし、逆に「自分はこんだけ一生懸命に勉強して、求めているのに何で仏教に遇えないのだろうか」と言つう人もおるだろう。それが、実は自力の仏教でない証拠です。自分で努力をしても無理だから。人と出遇うというのは、これは努力せんといけないけど、努力だけでは出遇えない。出遇えたからと言つて努力が実つたかどうかは分からぬ。そこに自力の仏教でない証拠があるので。だから「出遇い」ということが他力の仏教の核心になる。

これは僕が言つてゐるのではなくて、例えは皆さんが知つてゐる『歎異抄』だつたら、「幸いに有縁の知識によらずばいかでか易行の門に入ることを得ん哉」と書かれている。「幸いにも、先生にお遇いすることがなかつたとしたら、自分のような者は他力の仏教に目覚めることはなかつた」とちゃんと書いてあるでしょう。ですから他力の仏教、淨土真宗という仏教は出遇いしかない、と考えてもいい。その出遇いの中にさつき言つた阿弥陀の淨土が開かれ、正定聚に立ち、分別を超えた、善し悪しを比べるということを超えた感動を頂く、それが阿弥陀の世界ですね。ですから、ここからは他力の仏教の核心になるお釈迦様と阿難との出遇い、それが説かれていくことになります。

光明無量との出あい－地獄の因は自我にあり

もうこの間、くわしく読みましたから、さつとお話ししましょう。

『大無量寿經』に言わく、今日世尊、諸根悅予し姿色清淨にして、光顏巍巍とましますこと、明らかなる鏡、淨き影表裏に暢るがごとし。威容顯曜にして、超絶したまえること無量なり。未だかつて瞻覩せず」というところから始まります。今日のお釈迦様は体中から喜びを発し、清淨なる清らかなお姿をして、お顔はヒマラヤの如く光顏巍巍と輝いて、鏡を貫き通すような光に満ちておられます。「威容顯曜にして、超絶したまえること無量なり」。そのお姿は過去現在未来を貫いて超絶している無量のお姿をしております。これは分かれますね。「光明無量、寿命無量」です。ですから、どう言つたらいにかな、ぐだぐだ言わなくとも分かるでしょう。仏教の先生に遇つたと言う時には光明無量、まずは光明無量です。

それぞれあるでしょう。僕はよく分からぬけれども、皆さん、例えば、お茶とかお華とか、そういうものを丁寧に教えてもらう時があるでしょう。そういう先生に教えられることは光明無量とまでいかなくとも、たいへん大事なことを教えられますね。それから大学だつたら、やっぱりちゃんと学生の世話をしてくれる先生が流行る。ところがそんなことどうでもいいのです。それが理由であの先生に会つたなんて言う人がいっぱいおるんや。そんなことはどうでもいいのや。光明無量に遇わないと仏教に遇わんのよ。いいですか、僕が言つてるのと違うのです、そこにちゃんと書いとる。

阿難がお釈迦様に遇つたときに、まず遇つたのは光明無量。人間というのは生まれたときから「人間」になつてゐる。だから、人間はここから先しか分からんのや。人間はものが見えんようになつてい

る。もう「人間」になつた時から「人間」を前提にしてものを見つける。世界中そうです。テレビを見ていても何を見ていても、人間を問わないで、人間を前提にして前ばかり見ている。

例えば、戦争をしているとか、ここが核を開発したとか、どうしたとか、そういうことを全部前を見て言つてるわけやね。ところがお釈迦様の覚りというのは人間をはるか後ろに超えてしまつてゐる。あまり同じようなことを繰り返してもいけませんが、皆さんのが本当に苦しい時には、前しか見てないから、「あれが悪い」とか「これば悪い」とか周りの人を非難します。まさか自分のところに問題があるなんて誰も思つていませんね。いつも自分を立てようとする。

自分と相手を比べて、勝つか負けるか、いつもそんなことを競い合つてゐる。はつきり言うと「負けたくない根性」が動いてゐる。人間はだれでも、「それは自我というものの本性だから当然ではないか」と思つてゐるかも知れない。だけど、お釈迦様だけは実はそこに地獄のもとがあると見抜かれている。

そういうのは解説すると「あ、そうか」と思うかもしれません。ところが自分の生き死ににがかかつて、親鸞聖人のように、死んでしまおうと思つてゐる時に、「地獄のもとはお前の自我にある」と知らされると、初めてそれが突き刺さる。すると、今まで思つてもない、世界がひっくり返る。本来比べる必要がなかつたのだと分かる。本来勝ち負けなんて必要ないということが分かる。それぞれがそれぞれとして百パーセントなのだと、世界がひっくり返つてしまふ。そういう教えを「光」という。

時間は「今」にしかない

「光明」というのは、なにかピカッと光る何かがあるわけではな

い。これはやはり「教え」です。教えが光という意味を持つて、私たちのところに突き刺さつて、そしていつも自分を中心にして、いいか悪いかを立て、勝つか負けるかを競つて、人と比べて生きてきた、その全体が愚かだという。だから時間としては、過去・現在・未来といふうにしか頭では考えられない。ところが初めて「今」という、

時間としては本当は「今」しかないですよね。人間だけが「昨日があつて、今日があつて、今がある」と考えるわけです。

うちの猫はカリカリを毎日うれしそうに食べるのです。

それでうちの奥さんが

「なんで毎日毎日カリカリ食べるのやろう」と言うのです。だから「馬鹿か、毎日毎日つて、おまえ、猫は今しかないのやから、今、これうまいんやで」、

「そうやろうか、昨日も食べた」、

「猫はそんなことは思わん（笑）、今しかないのや、今、今、今、今としか時間がないんだから、今うまいんだ」つて言つたら、

「それやつたら私やつぱり猫になるの嫌やわ」と言つた（笑）。

かわいらしいでしよう、本当に（笑）。

言つてることは分かるでしよう。

だから、この「五徳瑞現」の最初は全部「今日世尊」ではじまるのよ。これが自覚語だというのです。自覚語というのは分かりますね、自分自身に自覚めた言葉です。

「今日阿弥陀」、あるいは「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」、「自身は現にこれ、今、罪惡生死の凡夫」、時間はこれ（今）しかないのです。だから「光明無量、寿命無量のお釈迦様に阿難は遇つたのです」

というところから始まつていくのです。

難しいですか、言つてることは分かるやろう。

これ以上僕はうまいこと言えないわ（笑）。

### 永遠の仏—五徳瑞現

そして先程申しましたように

光明無量の方を五つに開いて「五徳瑞現」、

寿命無量の方を「仏仏相念」、

こんなふうに今度は、救われた阿難の方から、阿難の言葉で述べていくわけです。

「大聖、我が心に念言すらく」「私はこんな感動を頂いたのです」と。

「今日、世尊、奇特の法に住したまえり」今日のお釈迦様は特に優れた法に立つておられます。

「今日、世雄、仏の所住に住したまえり」今日こそお釈迦様、あなたは仏です。

「今日、世眼、導師の行に住したまえり」今日こそお釈迦様、あなたは世間の何者をも導く導師の姿をしておられます。

「今日、世英、最勝の道に住したまえり」今日のお釈迦様は世間でまるで英雄のよう、最も優れた道に立つておられます。

「今日、天尊、如來の徳を行じたまえり」今日のお釈迦様は如から來た阿弥陀如來の徳を、はたらいてくださつております。

「去來現の仏、仏と仏とあい念じたまえり」過去現在未来の仏が、仏と仏と相念じたまえり。

これはもちろん今、過去と現在と未来の仏が相念じていると言つてゐるよう、お釈迦様の中に阿弥陀仏を觀てゐるのです。分かり

ますね。お釈迦様の中に阿弥陀仏を観ている。阿弥陀仏は「今現在説法」、今の仏です。だから阿弥陀仏の中に過去の仏も未来の仏もおる、今の私はそれには遇つたのだというふうに、お釈迦様の中に阿弥陀仏を拝見していると、こういうことを言つているわけです。その阿弥陀仏も去来現の仏、永遠の仏である。過去現在未来を超えた永遠の仏であると。

こういうふうに阿難が感動を述べたわけです。これが「世を超えた」という感動を持った阿難の言葉になります。

#### お釈迦様の出世本懐の言葉

ところが、その言葉を聞いた時に、今度はお釈迦様の方が、（前回も申しあげましたように、これまで説いて来た仏教ならば、阿難は覚りを悟つてない、菩薩の五十三の位からするとずっと下の方にいるわけで、その阿難が、いきなりお釈迦様を「仏だ」とか「阿弥陀だ」とかというふうに言うわけだから）お釈迦様の方がびっくりしたりやつて、「ちょっと阿難待て」「それ天の神様に聞いたのか、それとも（仏弟子の中で一番偉かつたのは舍利弗だから）、舍利弗にでも聞いたのかね」と問うと、阿難が

「諸天の來りて我を教うる者、あることなげん。自ら所見をもつて、この義を問いたてまつるならくのみ」  
「私が誰から聞いて、言つてはいるわけではありません。私が感じたままを申しあげたのです。」と言ふと、――

「善いかな阿難、問えるところ甚だ快し。深き智慧、真妙の弁才を

発して、衆生を懲念せんとして、この慧義を問えり」

「よく問うてくれた。あなたは自分では分からぬかも知れないけれども、今日は修行ができない、覚ることができないそういう人達

でもお釈迦様が如来と分かる、そういう仏教を説く日がやつとやつてきた。あなたが意識しなくとも世界中の覚りを悟れない衆生を憐れんで、この慧義を問うてくれたのだ」と言つて、

「如來、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまう。世に出興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯い、惠むに真実の利をもつてせんと欲してなり」。

これがお釈迦様の出世本懐の言葉です。

皆さん出世本懐の言葉くらい覚えておきなさい。それとも、これが覚えられないのだったら、「自分が何のために生まれてきたか」という出世本懐の方を言つたらどうか。私たちは「仏の本願の教えに遇うために生まれてきた」のです。

皆さんは気が付かんと思うけど、そうなのです。皆さんは分からぬと思うけれども、私たちのような凡夫が、比べるとということを超えて、最後には自分の人生に手を合わせて

「つらいことも苦しいこともいつぱいあつたけど、うれしかつた」と。

「これで十分なものになりました」と。私の先生のように、「いのちを終わつていける者までに育てられました」と。

そう言えるほど幸せなことはないでしょう。

だから分からなくとも、私たちは本願の教えに遇うために生まれてきたのです。お釈迦様は本願の教えを説くために生まれて來たのです。

「無量億劫に値いがたく、見たてまつりがたきこと、靈瑞華の時あつて時にいまし出づるがごとし」。つまり、阿難とお釈迦様のような出遇いは、これは淨土に何億年に一度咲く花、そのくらいしかな

い。「こんなことはないのよ」と言つてゐる。あり得ないことが起つてゐるのです。そのあり得ないことの意味をこれから私が説くというのが『大經』です。

「今問えるところは饒益するところ多し。一切の諸天・人民を開化す。阿難、當に知るべし」と。今問うてゐるところは、一切の衆生に大きな利益を与えるのだと。「一切の諸天・人民」みんな仏教に開化するのだと。

「阿難、當に知るべし」と言つて、前回言つたように、

- ① 「如來の正覺は」
- ② 「その智量りがたくして」
- ③ 「導護したまうところ多し」
- ④ 「慧見無碍にして」
- ⑤ 「よく過絶することなし」

この①②③④⑤が五徳瑞現に匹敵する。

だから阿難が五徳瑞現を、阿難の言葉で言つたから、お釈迦様が「そうそう、その通り」と言つて、「あなたが言つていることはこういう意味よ」というふうに、ここはお釈迦様の方から五徳瑞現に匹敵する言葉を述べられた。ここが大事なところです。こんなふうにして『大經』が終わつていきます。

次に『如來会』は「阿難、仏に白して言さく」というふうに、阿難の問の方から始まつてゐます。そして『平等覺經』は、阿難の問い合わせる形で出世本懷経が述べられていきます。ですから私が『大經』のところでも申し上げましたけれども、救われた阿難の方がお釈迦様に出世本懷を述べさせたのだと。だつて、お釈迦様はいくら偉い人でも救われた人が一人もいなかつたら仏でも何でもないから、だから救われた方の人が「あなたは仏だ」と言つて、そしてそれに答え

て出世本懷を述べた。当然のことで、そんなふうに、ここは順番がそなつています。そして最後に、五徳瑞現のことが憲興師の註釈で五つ述べられていきます。

眞の仏弟子—金剛心の行人

そして最後にお釈迦様が述べられた五徳瑞現の中で、「阿難當知如來正覺」、阿難當に知るべし如來の正覺は、という①のところは、

「すなわち奇特の法なり」と言つてゐる。

②③がここでは省略されていると言いました。これまで、なんでも②③が省略されているかということを詳しく書いたものはあります。けれども親鸞聖人が②③を省略したのだから意味がないわけがない。しかも逆に言えば④⑤だけ出している。

④は「慧見無碍というは、最勝の道を述するなり」。慧見無碍といふのは、最も優れた道である。「最勝」と言ふのは「最も優れた」という意味だけど、「この世を超えた道である」と言ふ意味です。言葉がないから、「この世を超えた」という道である。慧見無碍、「智慧で見た無碍道」、智慧で何を見たら無碍道になるのか、仏様の智慧によつて、何を見たら無碍道になるのかという意味です。「慧見無碍」、これは東聖典一九四頁を開けてみてください。「道」は無碍道なり。これはもともと『論註』の文章なのです。

「經」(華嚴經)に言わく、「十方無碍人、一道より生死を出でたまえり。一道は無碍道なり。無碍は、いわく、生死すなわちこれ涅槃なりと知るなり」

「生死即涅槃と知ること」これはもう大乗の覚りそのものやね。生死即涅槃を知ることそれが無碍道に立つということです。です

から『歎異鈔』でも「念仏者は無碍の一道なり」とあるでしょう。あれも障りない道、それはそうです。なぜ障りないかと言うと、生死、迷いの人生がそのまま仏様の世界であると知ること。うまく言えなけど分かりますか。迷いの人生がそのまま仏様の世界なのだと、だからどんなことがあっても、私の先生のように「私が頂いたものであります」と言つて引き受けて生きておられました。ああいうのだろうなと思いますけれども、ともかく、ここに、生死即涅槃と知ること、というふうにあります。

四番目が生死即涅槃と知ること、それからもうひとつ大切なのは、五番目が「無能過絶」、よく過絶することなし。これはダイヤモンドのような強い信念をいただくこと、これから皆さんと一緒に『教行信証』を勉強していく時に分かれますが、東聖典二四五頁、ここは大事なところですから、これから何度も開きますよ。二四五頁の最初のところ。「弟子」とは釈迦・諸仏の弟子なり」と言うところがあるのでしきう。ここに

「金剛心の行人なり。この信・行に由つて、必ず大涅槃を超証すべきがゆえに真仏弟子と曰う。」というふうに、「真の仏弟子」。『教行信証』は「本当に『大経』の他力の信心が分かれば真の仏弟子になる」と言つてゐるのです。ですから「信の巻」のところには、

「金剛心の行人」、これがひとつと、もうひとつは

「必ず大涅槃を超証する」、同じことです、

「生死即涅槃」。私たちの迷いの人生がそのまま仏様の世界であると頂いていける大きな信心の智慧は、必ず命終われば仏様の大涅槃の世界に帰つて行く。だからひとつは「金剛心の行人」、もうひとつは「必可超証大涅槃」これも覚えてください。いいですか、試験に出しますよ（笑）。

ですから親鸞聖人は②③を省いて④⑤だけを残すのは、『大経』の仏教、浄土真宗という仏教は、最終的には真の仏弟子になるのだ、ということを「教の巻」のところで、ちゃんと前もつて言つて言つてるので、いいですかね。そんなふうに「教の巻」はなつておりますので、短いところですけども大変大事なところです。よろしゅうございますか。ちょっと眠たかつたですか。大丈夫？

「真仏弟子と言うは、真の言は偽に対し、仮に対するなり」。真実の真ですね。これは、疑い、「偽」。あるいは仮に正しいという「仮」に対して「真」というのだと。「弟子とは釈迦・諸仏の弟子なり」。釈迦・諸仏の弟子といふ証拠は何かというと、「金剛心の行人なり」。この信・行に由つて、必ず大涅槃を超証すべきがゆえに真仏弟子と曰う。これ全部難しかつたら、「金剛心の行人」と「必可超証大涅槃」、これが「真の仏弟子」の規定ですから、この二つは覚えてください。いいですか全部覚えなくてもいいです。この二つだけは覚えてください。試験に出します（笑）。それじゃあちよつとだけ休憩します。

### 《講義二》

#### 臨終一念の夕、大般涅槃を超証す

それでは後半、もう少しお話をさせていただきます。先ほど申しましたように『教行信証』は、要するに単純な話です。「仏教が分かつたらどうなるの？」と言つたら、「真の仏弟子」になる」と、親鸞聖人はそう言つてゐると知つておいてください。「真の仏弟子つて何」と言つたら、ひとつは「金剛心の行人」。

これは例えば聖道門とか他の仏教の価値観に惑わされない、もう

ちよつと私たちから言うと、今の世間の価値観で本當によるべきものは何もない。だからそういう世間の価値観に惑わされないで、ひたすら仏教の教えに生きて行こうとすることと考へてもいいです。それが金剛心の行人、金剛心というのは、ダイヤモンドのようなという意味ですから、ダイヤモンドのようなそういう強い信念を生きていくこと。

それからもうひとつは、「命終われば必ず仏様の世界に帰つて行く」。

これは私の先生が亡くなる時に言つた言葉でした。真仏弟子の一番最後の結釈に、東聖典二五〇頁になりますけれども、「真に知りぬ。弥勒大士、等覚の金剛心を窮むるがゆえに、龍華三会の曉、當に無上覺位を極むべし」。

これはどういう意味かというと、自力で七地沈空の難を越えた八地の弥勒菩薩は等覚の金剛心を得て、そして五十六億七千万年の後に初夜・中夜・後夜という三つの会座を設けて、そこでたくさんの人を救つて、やつと仏になると、こういう意味です。これはもうこんなふうに説かれているわけです。

それに対して「念佛衆生は、横超の金剛心を窮むるがゆえに」、これです。金剛心の行人、阿弥陀如来の本願力回向の信心を頑いでいるから「臨終一念の夕、大般涅槃を超証す」。臨終一念の夕に、この世のいのちが終わる時に必ず仏様の世界に帰つて行くということ。

私の先生はこう言われました。「臨終一念の夕べに大般涅槃を超証するという信念を『今』いただいているということであります」と。分かりますね。「命終わつて必ず仏様の世界に帰つて行くという信念を『今』いただいているということが大切であります」というふうに先生は言われました。

そんなふうに、ここは『教行信証』でも一番、大変大事なところになつていくところです。そこに「金剛心の行人」と「必可超証大涅槃」、この二つを備えて真仏弟子になつていくというところがちゃんと押さえられています。だから、親鸞聖人は「教の卷」でも、それを言うために④と⑤を残したのだというふうに思われます。

よろしいですか？

今までのところで、「教の卷」で何がありますか、いいですか。

### 行の巻

それでは、「行の巻」に入つていきたいと思います。

「行の巻」は東聖典一五六頁を見ていただきますと、「諸仏称名の願」、諸仏に私の名を称えられたいという願があげられます。そして

「淨土真実の行」、「選択本願の行」。

「選択本願の行」の方はすぐ分かると思います。これは法然上人からいただいたお言葉です。

「淨土真実の行」、これは親鸞聖人の淨土真実の行。これからその内容に入つていけば少し分かると思います。

文章に入つていきましょうか、東聖典一五七ページのところ。皆さんと一緒に読んでみましょう。

「謹んで往相の回向を案するに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれもろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。かるがゆえに大行と名づく。しかるにこの行は、大悲の願より出でたり。すなわちこれ諸仏称揚の願と名づけ、また諸仏称名の願と名づく、また諸仏咨嗟の願と名づく。また往相

回向の願と名づくべし、また選択称名の願と名づくべきなり」。はい、ここまでですね。

## 大行

これは「行の巻」、「行の巻」というのは当然「行」ですね。実践の行です。それを表す巻ですから、ここは親鸞聖人がまず「行」について解説し、大切なところをきちつと述べているところです。ところが、この「行」と言つても、聖道門、あるいはもう少し広く一代仏教の「行」は、すべて人間の方から仏様の覚りの方に向かうという「行」です。

そうですね、皆さん「行」というと、やはりそういうふうになんとなくイメージがあるでしょ。お寺の子供さんでも、「本山に修練に行つています」と言つと「ああ修行に行つているのですね」とご門徒さんから言われる。だから真宗でも修行というか、「行」という。そうすると、「行」というと必ず私たちの方から、衆生の方から仏様の覚りに向かうという意味で、一代仏教の「行」という言い方は「涅槃に向かう道」という意味で、「向涅槃道」というふうに言います。

これは前にも菩薩の五十二位のときに書きましたけども、人間の方から如来の覚りに向かう、人間から如来の覚りへ、という方向になつてるわけです。私たちの考え方もそうなつてますし、今でもそうなつていてると思います。それは今日からやめていただきたい。だつて反対なのです。ここちょっとと読みますよ。

「謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり」。つまり、仏様の覚りが私たちのものになるためには行信（『教行信証』で言えば行信）、ここに仏様の覚りが実現してくるもとがある。だから「大行あり、大信あり」と言つて、「大行とは、すなわち無碍光如来の名を

称するなり」。ここまででは分かりますね。大行というのは無碍光如来のみ名（南無阿弥陀仏）、「帰命尽十方無碍光如来」と書いてありますね。ですから「無碍光如来の名を称するなり」、ここまで分かりますね。

「この行は、すなわちこれもろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり」。もろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。

「善法」というのは、法藏菩薩が出家をして、五劫思惟して四十八願を建てて、そしてやがて浄土を建立していく、その法藏菩薩のご苦勞、それを善法といいます。

「徳本」というのは、私たちが、皆さんが念佛によつて必ず仏になつていくことを言います。

この二つが「帰命尽十方無碍光如来」の中に納まつているというふうに言つておきます。

それはしかしよく考へると『大経』にそう説かれていますよね。法藏菩薩が世自在王仏のもとで出家して、どんな人も救われるようになつて、五百の間思惟し四十八の本願を建てて、どんな人も救われるよう二百一十億の諸仏の国を見て回つて、そして凡夫でも救われるというところだけを集めて浄土にしてくださつた。それによつて、私たちのよくなつた衆生は必ず仏になるということが決まつていく。

だから南無阿弥陀仏の名前の中に、「法藏菩薩のご苦勞」とその「結果」、(結果ということになると「智慧の光になる」と言つても間違いない)、ともかく「法藏菩薩のご苦勞」と私たちのよくなつた「修行しない者が必ず仏になつていく」という二つのはたらきが納まつてゐる。

真実功德と言つるのは名号なり

まず解説よりも文草を読みます。

「極速円満す」。だから私たち衆生のところにすぐに仏様の覚りが円満して下さるのである。仏様の覚りというのは「真如一実の功德宝海」である。だからこそ「大行と名づく」のである。

「極速円満す、真如一実の功德宝海」、これが善法・徳本のまあ証拠と言つて、善法・徳本が備わつてゐる証拠として、私たちのようなところに仏様の覚りが極速円満す。そして「真如一実の功德宝海」というのは聞いたことがありますか。

「真如一実の功德宝海なり」、真如一実の功德宝海というものは聞いたことがあります。

「一念多念文意」、(東聖典五四三頁)、

前にもここは読んだことがありますけれども、ゆっくり読みます

よ。

「真実功德ともうすは、名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆ

えに、大宝海にたとえたまうなり。一実真如ともうすは、無上大涅槃なり。涅槃すなわち法性なり。法性すなわち如來なり。宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり」。これで

ここに「真実功德と言つるのは名号なり」とあつて、名号の中に一実真如の妙理が円満してゐるために大宝海にたとえたまうのである。

「一実真如ともうすは、無上大涅槃なり。涅槃すなわち法性なり。法性すなわち如來なり。宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり」。こうありますね。

ここにあるように、真実功德といつてはたらきは名号のはたらきで

ある。一実真如の妙理が名号の中に円満してゐるから大宝海に譬えられるのです。一実真如といつては無上大涅槃である。涅槃は法性である。如來である。だから名号によつて、今すぐに如來のはたらきの中に私たちは生まれることができます。

「宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり」。こうありますね。

ですから名号に帰するということが起つた時に、名号の方から無上涅槃の、つまり私たちが比べるということを超えた涅槃のはたらきが名号の方から開かれて、まるで宝の海と言われるよう、衆生を嫌わず、さわりなく、隔てず、私たちを包んでくださる。これが真実功德といつてあると、こういうふうに言つています。分かれますかね。

### 大宝海

名号に帰した時に、この中にさつき申しあげたようなことがお分かりになつた人がおると思います。私たちが苦しんだり悲しんだりする時には、この婆婆の価値観の中で苦しみますよ。そして間に合わない婆婆の価値観を振り回して、まあ自殺してしまうところまで追い込まれていきますけどね。その時に、この本願の名号のはたらきは「比べる」ということを破ると言つてゐる。涅槃のはたらき、一如のはたらき、それは、私たちの過去、現代、未来と考えるような分別を中心とする考え方を破つて、本来比べる必要がない世界に私たちを解放してくださる。

そして「自分が自分でよかつた」というものにしてくださる。同時に、「自分が自分でよかつた」ということは、周りの人も周りの人で

百パーセントですから、周りの人も百パーセントとして尊敬して生きていくことになる。

これまで横の関係で、娘とか、奥さんとか、そういう関係でしか見れなかつたものが、如来と私で百パーセント、如来と奥さんで百パーセント、如来と娘で百パーセントというふうに、如来を通じて人間の関係が回復されてくる。そういう一如、つまり涅槃の世界が名号の方から開かれてきて、そして私たちから言えば大宝海、大きな海のような仏様の世界に本来おつたのだと。

今でも皆さん仏様の世界の中にあるのよ。自分の頭がいいから分からんようにしているのよ。頭が良すぎるんだ。だから自分で分からぬようにしている。分かりますかね。

それが自分の頭が間に合わないようになつた時に、初めて仏様の世界の方から開かれてくる。その次のページを開けてみましょう、五行目のところですが、――

「大宝海は、よろずの善根功徳みちきわまるを海にたとえたまう。この功徳をよく信ずるひとのここころのうちに、すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功徳の大宝、そのみにみちみづがゆえに、大宝海とたとえたるなり」。

「大宝海」というのは、すべての善根功徳が、仏様の善根功徳が満ちきわまつて、海のように広い世界である。「この功徳をよく信ずる人の心のうちに、すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり、しかれば金剛心の人は、知らず求めざるに、功徳の大宝、その身にみちみづがゆえに大宝海と譬えたるなり」 分かりますね。

## 人間を超える道

あのね、誤解を恐れずに申しあげますと、今のところが、凡夫の身のままの救い、真宗の「覚り」です。

苦しんできたことをよく考えると、全部、世間の価値観の中で苦しんできた。その世間の価値観が何も役にも立たない、それでもまだ世間の価値観しかないから、それしか考えられない。夜も寝られないし、どうにもならない、そういうことが続くわね。その時に、さつき言つたように、「負けたくない」というか、自分が「どうしても譲りたくない」という、その本性が地獄を作つてはいる、そのことが自分的心に突き刺さつた時に、初めて「人間というものは悲しいものやなあ」と言うか、「自我を生きていくということはつらいことやなあ」と言うか。

仏教というのは人間を超えるとする道です。人は自分のことを置いといて、よりよく生きようとか、自分の人生を豊かにしようとか、します。カルチャーセンターなんかに行く時、みんなそうじやないですか、自分の人生を豊かにするための趣味を何かやつたりとかね。仏教はそういうのとは違うのです。最終的には自分自身も徹底的に否定されるからです。人間は本当は仏教を聞く耳を持たんです。ちょっとでも人から悪口言われたら夜寝られないでしょう。それが全面的に否定されるなんて言うのは絶対にいやです。

だから「不諳の友」です。僕らは本当はお釈迦様を望んではないのです。韋提希のように、「私がこんな目に遭つていたら、阿難と目連だつたら、友達だからやさしく慰めてくれる、だから、あの人たちだけでいい、お釈迦様は来なくていい」と言うのです。そしたら「そんなことを言つていたら死ぬぞ」と、お釈迦様が出て行くわけです。

仏教は自己否定、人間の全否定を通すのです。完全に否定される

ということを通して、自分の価値観が何にも役に立たない「大きな世界」がもともとあつたことに気づく。

「大きな世界」、それは警えて言えば「生まれてすぐの世界」と言つてもいいかもしけん。生まれた所も親も国も何にも選べない。だけど、ちゃんと生まれてきて「いのち」は引き受けている。最近は親が殺すようなこともあるけど、それでも最後まで引き受けた殺されていく。

そんなふうに人間の「いのち」というのは、生まれてきた時には、何にも本来比べる必要がないし、だれとも比べないで、そして与えられたものを与えられたもののように引き受けている。それが四歳か五歳ぐらいになつて「自我」が出来ると、今度は自分の都合の方が勝つてしまふから、「いのち」の上に「自我」が出来たのに、「私のいのち」になつてしまふ。私の家内、私の子供、私の家庭、全部自分が中心になる。そうなつて本来の世界と逆さまになつてしまふ。そういう私たちの価値観で自分の人生を考え、苦しんでいく。

それは仏様から見たら逆さまになつていて、だから、今度は、その「逆さまになつていて」ということをよく教えて、「地獄を作り苦しめているのはあなた自身なのだ」ということを教える。世界は、本来比べる必要がない世界、本来善いとか悪いとかがない世界、本来すべてのものが百パーセントのあるがままの世界、そのようなものとしてある。

その「真如一実」という世界を「名号の方が開いてくれるのだ」と書いてある。

大行一如來から衆生へ

だから誤解を恐れないように言いますけど、これが真宗の親鸞の

「覚り」です。親鸞は凡夫だから「悟つた」とは言わない。言わなければ、聖道門ではこれを「悟り」と言うのです。だけど親鸞は「悟つた」とは言わない、凡夫だからね。だけどこれが「覚り」です。「覚り」がなかつたら仏教じやない。「凡夫のままで大きな一如の世界の中にある、名号がそれを開いてくれるのだ」と言つてはいるでしょう。「どれだけ私たちが、出来が悪かろうがよからうが、それを嫌わず簡ぱず、ちゃんと向こうから摂めてくれる。そういう向こうから開かれてきた一如・涅槃の世界、それを開くのが名号なのだ」というふうに言つてはいるわけです。だから「人間から仏へ」という、これまでの発想じやなくて、逆に「涅槃の方が名号として人間の方に来てくれるのだ」と、こういうふうに方向が全く逆になつてはいる。このあたりに、今言つた、凡夫がだれでも救われていかなければならぬ、凡夫が救われる仏教の、他力の仏教の、親鸞聖人の仏教の特質があります。

そういう意味では、これは聖道門では理解できない。つまり「行」の概念が違うから、行というのは「人間から悟りへ」というのが行なのであつて、なんで悟りの方から人間の方に来るやと。なんでそんなことが起ころるやと。それが善法・徳本のはたらきです。これは今日はちょっと時間がないからこの次に詳しくお話をされるけれども、なんで悟りの方から人間の方に来るのや、そんな馬鹿なことないやろうと。

いやそれは「法藏菩薩が全部を救いたいと四十八願を建てて、そして名号ひとつにまでなつてくださつた、法藏菩薩のはたらき。そこに善法・徳本のはたらきがちゃんと備わつてはいるのだと。だからそれによつて涅槃の方が私たちの方に開かれてくるのだ」というふう

に、全く行の概念が反対になつていますから、今までの行の概念で間違えられてしまう。だから、親鸞は「行」と言わないで「大行とは、則ち無碍光如来の名を称するなり」、こういうふうにわざわざ「大行」という言葉で表します。

「大」というのは「如來」を表します。「如來の行」と考へてもいいけれども、ともかく「行」と言つただけでは包み込めない、今までの概念ではとても表せない、だから特別な言葉を設けて、「大行」という言葉を設けて、如來の方から衆生の方に開かれてくる、覺りの方が開かれてくるのだと、名号によつて。なんでかというと善法、徳本ということが備わつた名号だからだと。つまり名号は法藏菩薩のいわれが備わつた名号だということです。この辺はなかなか難しいと思ひますけれども、親鸞聖人のおしゃつていることはそういうことです。

### なぜ名号を因と果に分けるのか

大学院の学生の時に、私は、まあ意地の悪い先生がおりまして、名前を言うのはあれですけれども、廣瀬果というのですが（笑）、その先生が意地が悪いというのか、半年ゼミをやらされまして、要するに前期全部終わると、「次またやつてきてください」。「えー」と。終わると「次またやつてきてください」。しつこいというか、もうしまいには何もやつていかないで、「わー」と言つていましたけど。

その時に「親鸞聖人はなんで名号を因と果に分けるのですか」と聞かれたことがありました。皆さん分かりますか。名号を親鸞は因と果に分けるんです。知つてますか。いっぱいあるのですけどね、たとえば、今たまたま開けたところです。東聖典五四七頁、終わりから六行目のところに「尊号ともうすは」とあるでしょ。そこに「南

無阿弥陀仏なり」。これはまあいいですよね。その次「尊はとうとくすぐれたりとなり」。これもいいでしょ。

ところが、「号は仏になりたもうてのちの御なをもうすなり」。こんなふうに、名号を「名」と「号」に分けて、「名」が因、「号」が果というふうに、因と果に分けて説明するのです。これはここだけじやなく他のところにもいっぱいあります。それを学生の時に「親鸞聖人はどうして名号を因と果に分けるのですか」と聞かれて、答えられなかつたのです。誰か答えられますか。その時すぐに答えられなくて、次の時間に思つたことを言いましたけども。

まあ単純に言つると、凡夫が凡夫のままで救われるために名と号と分けた。「名」は、因の方は法藏菩薩のご苦勞でしょ。それは私たちが凡夫であるということを知らせるためです。「果」の方は光明無量、寿命無量と言つてもいいでしょ。その「果」のはたらきよつて覺りの中に包み込むためです。

そんなふうに、例えれば逆に言つと、いいですか、聖道門だつたら覺りを悟るわけでしょ。果の悟りだけでいいのです。果の悟りだけあるわけで、それを「手に入れなさい、頑張んなさいよ」と言つていいだけの話だから、果の悟りだけでいいわけです。悟れなかつたら、「それはお前修行が足りんからや」という話になる。

ところが「凡夫を凡夫のままで救う」というのにどうするかというね。それはなかなか難しいんですけども、まずは一切の人を凡夫に帰らせる。みなさん、凡夫に帰つてなかろうが。なんか中途半端な凡夫やろうが。都合が悪い時だけ「凡夫や、凡夫や」と言つて。酒飲みに行つて、げろ吐きながら「いやー、やつぱり凡夫や、しゃーないなー」（笑）みたいなこと言つて。都合が悪い時だけ凡夫と言うのや。

そして、そうかと思うと、また頑張つて偉そうになりたいわけです。なんかよう分からんというか、要するに「凡夫」になつてないのです。だから「有無を言わざず凡夫だ」というところに引き戻す。そのため法藏菩薩の五劫の思惟と兆載永劫の修行があるのでです。

### 凡夫に帰る

皆さん、一回「凡夫」に帰つて、らん。「ああ、やっぱり本当に凡夫やつたんや」と帰つたら、「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわらがためなりけり」と言うでしよう。自分が凡夫やと分かる前に、仏様の方が先に「凡夫や」と言うとつたと。なんで今まで気が付かなかつたのかと。あの九章の言葉はなかなかいい言葉ですよ。「仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば」。

仏様の方が先に五劫も思惟して「煩惱具足の凡夫」と言つていたのやから。私が今凡夫と氣付くよりも前に言つていたのやと氣付いてみれば「申し訳なかつた」と言つて頭を下げる。まず凡夫を「凡夫」

に帰す。そして、無量寿・無量光という光によつて、私たちの分別を超えた涅槃の海のような、(この「海のような」というのが浄土教の覚りの特質やと思つてください)つまり、海のように「外から包んでいる」と言う、自分が「覚つた」とは言つてない。「海のように外から仏様の悟りが包んでくださつてゐる」と言つている。

だから、親鸞聖人の場合「大宝海」というのは何遍も繰り返される。そして皆さん、これを言つてくれた人は偉い人やと僕は思いますが、

「観仏本願力　遇無空過者　能令速満足　功徳大宝海」(仏の本願力を觀するに、遇うて空しく過ぐる者なし、能く速やかに功徳の大

宝海を満足せしむ)、世親菩薩がそう言つたわけです。だから世親菩薩が、あれが浄土教の覚りを一番最初に偈にしてくださつてゐる。だからあそこを親鸞聖人は解説しているのです。

誤解を恐れないと、そういうことになります。これは実は聖道門で言えば悟りのことだと。けども凡夫の仏道だから「悟り」と言わないで「大宝海」、海のような悟りのはたらきに包まれたと、「大宝海」と言うのであつて、「大行釈」ここに親鸞聖人が述べている、大行のはたらきがあります。つまりこれまでのようく、一代仏教のように「人間から仏様の悟りに」というのではなくて、逆に「仏様の悟りの方から人間の方に」来てくださつてゐる。一代仏教の「行」の概念をまつたく逆さまにひっくり返して、そして言葉も「大行」という言葉で表してゐる。それが「行の巻」だというふうに知つておいてください。そこに他力の仏教、つまり「凡夫がそのままで救われる仏教」があるのだということ。ここが大切なところです。

ちょうど時間になりましたが、いかがでしようか。  
ちょっと難しかつたかね。  
そうでもなかろう。  
難しい?

ちょうど時間になりましたが、いかがでしようか。

ちょっと難しかつたかね。

そうでもなかろう。

難しい?

## 【質問二】

(質問者) ありがとうございました。今日はちらつと出たことなのですが、前回の講義録をいただいて、それを見て疑問に思つたところがあるのです。

それは菩薩道という五十二階のところに「七地沈空」というのがあります。先生の著書『親鸞の主著『教行信証』の世界』ですと四十頁のところに図が書いてあります。この表を見ると十地の中に七地沈空というところがあります。今日も「凡夫のまま救われる」というお話をありましたけれども、この表を見ると十地というものは菩薩のところに入つてゐる。下から十信のところが「外凡夫」、次の十住、十行、十回向のところが「内凡夫」、次の十地からが「菩薩」。そこに「七地沈空」というところが出来ます。向涅槃道というようなことで、「昇つていく」という考え方をやめてください」というようなお話がありましたけど、「凡夫のまま救われる」と言つた時には、その七地沈

は、大乗の菩薩たち、観音、勢至、それから弥勒菩薩、そういう菩薩たち、そういう二つが『大経』の対合衆です。

ですから誰もこれを注意してませんけども、例えば先ほど言いました第十八願成就文、本願では一番大切な十八願の「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至十念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す」。これね、普通、凡夫の救いだけなら、「往生をうる。」「。」でいいと思います。ところがわざわざ「往生を得て不退転に住す」と。不退転というのは、これは大乗の菩薩道の悟りですからね、それを二つ並べて書かれてはいるでしよう。

つまり『大経』というのは、そういう凡夫が救われるということと、それから大乗の菩薩たちが救われるということと、第十八願によつて、どつちとも救われるということです。

「救われる」という言葉がおかしかつたら、大乗の菩薩が菩薩道を全うする、十八願によつてね。それから凡夫は淨土によつて救われる。その一つともが阿弥陀の本願によつて実現されると説かれるのが『大経』だと知つておいて下さい。『大経』という経典は普通の経典ではない。とんでもない経典で、そういうことを知つておいてください。それから、それをよく知つた上で、菩薩道を凡夫の仏道に転換した曇鸞のところをよく勉強すれば、今君が言つてゐることはそこで分かる。

(先生)『大経』という経典は、これは皆さんせつかくだから知つておいてほしいのですが、対合衆(対合衆というのはお釈迦様が説法する相手)、相手が私たちの所依の聖典ですと、お釈迦様の直弟子たちの五比丘や阿難を中心にするグループ、それがひとグループです。

ところが『大経』には異訳の経典があり、異訳の経典の『平等覺經』を見ますと、その中に優婆塞、優婆夷という、いわゆる在家の信者、在家の皆さんのような女性・男性、それも含まれています。ですか、ひとつは阿難を中心とするグループ(凡夫も含む)。もうひとつ

けど、今はその時間がないから、はつきり言つけど、菩薩道の段階、それは曇鸞が言つておるよにお釈迦様の方便です。この世界で、私たちの娑婆で仏教を説こうとすると人間は必ず比べるということがもとになつてゐるから、だから低いところよりも高いところよりももつと高いところよりも高いところといふうな頭になつてゐるか

ら、それをもとにしながら、お釈迦様が方便として説いたので、仏教の悟りというところからすると、こんなものは方便だと書いてある。そしてこんな階段みたいなことで「ごじやごじや言つてはる奴は仏教が分からん奴やと書いてある。これは僕が言つてはるのじやない（笑）、曇鸞が言つてはいるのです。「階段を下から昇るとか、上から昇るとか訳の分からんことをまだ言つてはるような馬鹿がおるのやつたら、それは仏教が分からん奴だと言え」とちやんと書いてある。だから方便なのです。なぜ方便になるのか、『論註』を読め。『論註』の「不虛作住持功德」のところに書いてあるから。もし説明してというのなら、この次にでも説明してもいいけれども時間がかかるぞ。それでいいか。

つまり凡夫は、凡夫が救われるということを菩薩道の段階の中で考えたらいけないということです。そんなところに段階があるじゃないかなどと言い出したら混乱してはいけないから、そんな段階の中で凡夫が救われるということを考えたら、訳が分からなくなるようになるのだから。それは方便なのだとつてはいるのだから。それは方便なのだとつてはいるのだから、その場合には、段階で考えるのは菩薩道の方。七地沈空をどうやつて越えるかという菩薩道の方はそれで考えなさいと。けど、「凡夫が救われる」という場合には、それは「方便なのだからいらない」とちやんと言つてはいるから、「段階で考えたらだめ」ということは分かることが分からんようになるということです。

（質問者）そういう意味では、自分においては七地沈空ということは問題にしなくていいということですか。

（先生）そうそう。だつてお前、七地とはどんなとこやと分かつてはいるのか。なんでお前のところで七地が問題になるの。そつちの方を聞かせてほしいわ。どういうこと。お前は十信まで行つてないん

やぞ。さつき「外凡夫」と言つたけど、ちがう、あれ、「げほんぶ」というのや。お前、外凡夫までも行つてないんやぞ、それがなんで七地が問題になるの。

（質問者）自分が聞法をしてきた中で、「こ」までは自力で頑張らなくてはいけない、だけどそこからはやはり自力の限界だから」というようなお話を聞いたことがあつて、なんかそういつた段階があるのかなあと。

（先生）それはあるかもしねないけれども、それが「七地」というわけにはいかないでしよう。時々そういうふうに勘違いしている人がいるのです。専修学院にもいた「僕、七地なのですけど」と言つて（笑）。明後日みたいな顔しとつたけどな。それは七地なんてとんでもない。七地は菩薩なのです。だから自力の限界ということを考えるには、それは確かに自力の限界ということはそこで考えられているわ、菩薩として。しかし、それはいいか、百八ある煩惱を全部捨てて、最後まで全部煩惱を捨てたと。そして求道心、菩提心だけ残つてはいる。ところが、七地のところで、「その菩提心も煩惱だ」と言われるのです。

お前は煩惱のかたまりでしよう。私もそうやけど（笑）。だから、まずはいいか、この五十二位のところで凡夫が救われるということを考えたらいけないということ。お前自身のこととその中で考えんな、ややこしくなるから。それは曇鸞の『論註』を一回よく読んでみたらいのや。すると凡夫が救われるということがどういうことかということが分かつてくる。だからそこ（五十二位のところ）で考えない方がいい。

### 【質問二】

(質問者)・すみません、私ずっとお話を聞いていて、ちょっと気になつた言葉なのですが「死ぬときに分かる」ということを先生今日もおつしやいましたが、「死ぬときに分かる」というのは、分別がなくなつてから分かると考えるのでしょうか。

(先生)あのう、僕の口癖ですみません(笑)。誠に申し訳ない。たゞ『観経』には「下品下生」のところで、命終わつていく時に、「仏様のことを思いなさい」と言うと、「いやいや、それはもう仏様のことを思うほど余裕はない」と。痛いわけで。「それなら南無阿弥陀仏を称えなさい、そしたら必ず仏様に救われるから」という。『観経』の下品下生のところは、今申し上げたように、命終わつてからの救いというふうになつています。けどもそれは『観経』の方便なのであって、親鸞聖人が『教行信証』で語つた救いは、『大経』の「今の信心」に救われていく。これが親鸞聖人の立脚地です。だからそういう意味で、『観経』では「死ぬ時に救われる」と書いとるけど、『大経』では「今救われよ」と言う。「まあ死ぬときに分かる」と言つてみたりするのは一つは『観経』があると思います。

して顔も蠍人形のような真っ白の顔でした。言葉も何と言つているかよく分からぬ。奥さんが「はー」と言つて聞くのですが、その時にこう言われました「生きることと死ぬことは一如です。みなさんありがとうございます。南無阿弥陀仏。」と。「ああ死ぬときに分かるのだなあ」と思つた。

つまり、あんまり分別がはたらかなくなつてきて、そのまんま命のまんま言つているという感じがしました。だからものすごく感動しました。そして僕の話になるから帰つてくださいと言つたら「いやだ」と言つて帰らないのです。僕の身にもなつてください、たまつたもんぢやないですよ、そんなもの。だけど一生懸命しやべつたら、それから二日後でしたか亡くなられました。だから死ぬとき分かるつて。まあ冗談ですけど、『観経』に書いてあるのは、こういうことを言つてゐるのかなと思いました。

### 【質問三】

(質問者)私が称える限りは、どんな考え方をしようと仏様の行は成就しているわけですよね。称えてこの行が成就、私の上でもみんなの上でも、してゐるのですが、それからが難しい、それからどうしたらよろしいのでしょうか。

(先生)それはちょっと読み違えているのとちがいますか。「往相の回向に、大行あり、大信あり。大信に裏打ちされた大行は無碍光明の報恩講には、もう会えないかもしね。余命があと五か月だといわれました」と。「けど、僕は何とかして頑張つて、先生ともう一回会つて死にたい。そしてご門徒さんにもお礼が言いたい」とつていたのですが、生きていたのです。

次の年に行つたら。けどもう危篤状態でね、もう骨と皮だけ、そ

(先生)そうです。

(質問者)背景に大信がない大行は、先生が今言われていることに入つていなといふことですね。

(質問者) 信に裏打ちされていない大行を続けても、じやあどうすればいいのですか。

(先生) 大信、大行大信ということが大事なのでしょう。行信の発起、それが大事なのでしょう。もつと言えば信心、「弥陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとするべし」。ただ信心は君の責任。

(質問者) 信心も仏様の責任じやないのですか。

(先生) 君の責任(笑)。

(質問者) だから、そこで大行をしてるんだけど、そこでまた元に戻つて向涅槃道が自分にしみ付いてるから、この大行をずっと続けとつたら信がいただけると思つて、ほとんどの人がしてると思うのですよ。だけど先生は、「いや順番が違う」と。その大行をするときに、大信が備わつてないとダメだと言うわけですね。

(先生) うん。 そうそう。

(質問者) そうするとややこしい。

(先生) それは当然そうです。本願の成就文でも、十一願の成就、十七願の成就とあつて、一番最後には、第十八願の成就文。「ただ信心を要とすとするべし」。

のが明恵です。それは正しいのです。その通りです。その通り、正しいんだ。

その意味では親鸞聖人の『教行信証』と明恵とはある意味で言えば立場は一緒です。信心が大事だという立場は一緒。ただ明恵の場合は自力の信心を言つてはいる。親鸞の場合は他力の信心を言つてはいるというので違うけどね、だけど「信心が大事だ」という点においては一緒。「行信」という場合に必ず、だからさつきの文章でも必ず「行信」と言つといて、そのうえで「行」ということを規定しているわけです。

(質問者) これから先は怒られるかもしれないのですけども、それでは大行するときの信はどうしたらいただけるのでしょうか。

(先生) それは君の責任や。

(質問者) そうですか、仏様の責任ではない?

(先生) 違う、違う。

(質問者) 簡明なお答えの先生にしては、えらい突き放している言い方ですが(笑)、もうちょっと何か。

(先生) いやそこは、どう言うてやりようもない。それは君の聞法の苦労だし、聞法の歴史とかいろんなものがあつて、それの苦労で、まあどういう形で君が信を得るか、さつき言つたように、どこで信を得るかは私なんかには全く分からぬから、そこに他力の仏教がある。だから「君の責任や」としか言いようがないのです。

【質問四】

(質問者) お願いします。前回の質問三のところで、一如の覚りの

信心歡喜がなかつたら空念佛になるではないかと言つて批判する

中に包まれた、凡夫のまま包まれたといふか、大宝海に包まれたと

いうことが、聖道門の悟りと一緒にだということをおつしやつたのですけど、まあ浄土真宗、浄土教の方ではそういう表現をされるけど、聖道門の方ではどういう表現というか、どういう状態が、それと同じような悟りになるのかなと思つて。

(先生) ああ、例えば、親鸞聖人の言い方、聖典で分かるようなどでいうと、

「生死即涅槃を証知する」、「生死即涅槃を覚る」とか、

「煩惱即菩提」とか、

これは大乗の旗印です。「煩惱即菩提」、「生死即涅槃」、これは覚りの名前です。

(質問者) それとついでに、同じところの下の方に、「信心によつて生死即涅槃を証知するというふうに表現します」と、「この場合は、悟るということと決定的に違うということを親鸞聖人ははつきり分けています」と。これは浄土教の方の信心によつて生死即涅槃を証知するという表現ですね。これは聖道門とは違うということですね。

(先生) 違う違う。

(質問者) そこのところはどう違うのですか。

(先生) 本願によつていただく覚りです。ですから最終的には、これはまた、難しい問題になると思いますけども、二十願の私たちがどうしても抜けない自力。仏教が分かつても抜けないし、分からなれをどう助けるかが仏様の責任。だからそれを十八願で助けるといふうに言つてゐるわけです。だから二十願と十八願を紙の裏表だと見抜いたのが親鸞の凄いとこです。だから二十願を「果遂の誓い」と言つて、十八願でそのまま救い取ると、救い取るのは仏さんの仕

事だから私に任せておけと言つて十八願で救うのやと。だからここに「生死」と「涅槃」とがひとつになつてゐるのです。それは本願によつていただく、「証知する」のだと。悟るというのではなくて、「本願によつていただいた生死即涅槃なのだ」というのが、そこだと思います。

(質問者) 「本願によつて」ということ、そこが違うということですね。

(先生) そうです、そうです。そこが大事。決定的に違う。

※「恩徳讚」のあとで、先生の独り言・・・

ここ、獲得名号のあれですけど、「自然法爾章」に、「名の字は、因位のときのなを名（みょう）」といふ。号の字は、果位のときのなを号といふ」と。ここに因と果とちゃんとあつて、ほかのところにもあるのです。ですから、ここで、いきなり僕、因と果と書いたけど、実は、こつちの方が正確かなと思つてます。いや申し訳なかつたですね。

#### ▲ メールでの質問 ▼

(田畠先生) 先生の著作『親鸞の主著『教行信証』の世界』の中です「さとりをさとる」という場合の漢字を「覚りを悟る」と書かれています。「覚り」と「悟り」の使い分けは本来ないと思ひます。どちらでもいいのですが、修行によつて悟ると使ひますので、私は明らかに自力で悟るという場合には、「悟り」を使つてゐます。それに対して「さとり」と名詞で使う場合には「覚り」を使つてゐます。これも私の大まかな使い分けで、それほど気にされなくてもいいかと思ひます。

文責は編集者の田畠正久にあります。